

令和6年度第2回

さっぽろ未来創生プラン推進有識者会議

会 議 録

日 時：2024年9月11日（水）午前10時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 12階 1～3号会議室

1. 開 会

【玉腰座長】

それでは、お時間となりましたので、令和6年度第2回さっぽろ未来創生プラン推進有識者会議を開催いたします。

本日の進行を務めさせていただきます玉腰です。

前回同様、活発な意見交換をお願いできればと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2. 委員の紹介

【玉腰座長】

まず、1回目の会議をご欠席された方と新たに委員になられた方がいらっしゃいますので、事務局よりご紹介をお願いいたします。

【里政策企画部長】

政策企画部長の里でございます。

本日は、お足元の悪い中、また、朝早くからお集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。

私から、本日、初めて顔を合わせます2名の方々をご紹介させていただきます。

まず、株式会社とける代表取締役の柴田涼平委員でございます。

【柴田委員】

おはようございます。

株式会社とける代表取締役の柴田涼平です。昨年度に引き続き、委員を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

【里政策企画部長】

続きまして、株式会社北海道新聞社取締役企画室長の堀井友二委員でございます。

【堀井委員】

北海道新聞の堀井と申します。よろしくお願いいたします。

【里政策企画部長】

委員の皆様、本日もどうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日の会議は、札幌商工会議所副会頭の中田隆博委員、北海道文教大学人間科学部地域未来学科教授の吉岡亜希子委員、そして、第1回の有識者会議にはご出席をいただいております渡辺委員ですが、所属の人事異動がありまして、北海道銀行からは地域創

生部地域創生部次長の佐々木聡一委員に新たに就任していただきました。ただ、本日は残念ながらご欠席ということで、3名が所用によりご欠席をされております。

また、大谷委員にはオンラインでご参加いただいております、本日は12名の委員の皆様から意見を伺わせていただきたいと思いますと思っております。

なお、猪飼委員におかれましては、所用のため11時頃ご退席予定と伺っております。

3. 報告事項

【玉腰座長】

それでは、議事に入ります。

本日は、11時30分までには終了したいと思っておりますので、スムーズな運営にどうぞご協力ください。

まず、報告事項(1)の令和6年度第1回さっぽろ未来創生プラン推進有識者会議における主な意見について、(2)の第3期さっぽろ未来創生プラン(案)概要及び(3)の北海道総合研究調査会(HIT)の実施する研究におけるモデル地域としての協力について、まとめて事務局からご説明をお願いいたします。

【田村企画課長】

企画課長の田村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私からのご説明に入る前に、配付資料の確認をしたいと思います。

次第のほか、資料1の委員名簿と座席表、資料2の第1回会議における主な意見、資料3の第1回会議における主な意見に関する補足資料、資料4の第3期さっぽろ未来創生プラン(案)概要、資料5の北海道総合研究調査会(HIT)の実施する研究におけるモデル地域としての協力について、資料6の北海道総合計画について、をお配りしています。

過不足はございませんでしょうか。

それでは、説明に入らせていただきます。

まず、次第に従いまして、資料2と資料3を用いて先に前回の振り返りをさせていただきます。

資料2をご覧ください。

前日も活発なご意見をいただいたところでございます。改めまして、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

いただいたご意見を分野別に整理をし、その対応の方向についてまとめましたので、ご説明したいと思います。

まず、1番ですが、札幌の人口減少に併せて近隣の市町村の人口はどのような状況かというご質問があったかと思います。当日、基本的には減少傾向というお話をしたのですが、もう少し分かりやすくしたいと思われましたので、資料3の1ページ目をご覧くださいでしょうか。

令和2年の国勢調査とそれに基づく将来推計が発表されており、そのデータでございます。今はこれが一番公式なもので、見てのとおり、増減の差はありますが、基本的には、2020年、それから2060年になるまでの間においてはほぼ減少傾向でございます。

もう少し見やすくするために、2ページ目では、2020年の数字を100としたときに、その前後でどれぐらいの割合、パーセンテージになっているかというグラフもつくってみました。微減のところもあれば、大きく減るところもあり、札幌市周辺の市町村もこのような状況であることがご確認いただけるかと思えます。

3ページ目は北海道庁で作成されている資料でございます。石狩地域をはじめとした道央の広域でこんなことをやっていきますというような方針をつくって出しているのですが、その案となります。

大きく、空知、石狩、後志、胆振、日高といった地域で、交流人口や関係人口の増、若者の地元定着、安心して子どもを産み育てられる環境づくりに取り組んでいくことが示されております。

資料2に戻りまして、2番目では、子どもを欲しくないという声を周りで耳にするとか、漠然とした世の中への不安というお話をいただきました。後ほど説明いたしますが、札幌 Well-being 指標というものを使って取組を進めていたり、札幌市の目指すべき将来像、子育てのメリットや楽しさを伝えていく取組をしていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

3点目ですが、離婚率や保護率の高さも合計特殊出生率の低さの要因ではないかというようなお話をいただきました。こちらについては、資料3の5ページ目をご覧くださいなのですが、それぞれの市について、棒グラフが生活保護受給率、折れ線グラフが合計特殊出生率となっています。札幌市と大阪市が、離婚数も生活保護受給率も高く突出しており、合計特殊出生率が低い傾向にあります。ほかの市については、若干、この傾向に近いものはあるのですが、明確な傾向まではなかなか取りにくいと思っております。

資料2に戻っていただいて、3番です。若い人が出ていっても、戻ってきてくれればいだけではないか、20代でいろいろな経験をして30代で戻ってくる、そういった取組が大事ではないかというお話をいただきました。

ごもっともなご意見でございます。一度、道外に出た若者が戻ってきてくれるようなUJターンの推進など、後で出てきますけれども、そういった取組を進めていきたいと考えております。

一方で、去年行ったアンケート調査等からは、市内の大学生の中でも、市内あるいは道内での就職を希望しながらも結果的には道外に出ていってしまっているというような数字が見えてきています。具体的には、市内の理系の男女の大学生を対象に行ったアンケートで、道内もしくは市内での就職を希望しますかという設問に対する回答では、大体60%強ぐらいが道内企業への就職を希望するという回答結果が出ている一方で、2023年度の就職状況を見ると、道内の理系の学生の就職率が50%を割りました。この差は、恐ら

く、仕事のバラエティーさなどでカバーしていく必要があると考えているところでございます。

5 番目ですが、多様性を許容しない地域からは人が流出するというお話がありました。札幌市でもいろいろと取り組んでいるところでございますが、それ以外の取組といたしましては、後ほど出てきます札幌 Well-being 指標というもので少し見えるようになればと思っております。

6 番目ですが、人口減少対策に関する札幌市のビジョンを伝える必要がある、こんなまちにしたいというイメージがないというお話をいただきました。こちら後ほど資料の中でご説明いたしますけれども、将来の姿はこんな形を目指すべきという案を私どもで考えましたので、ご意見を頂戴できればと思っております。

7 番目ですが、単身者がこれから増えてくることへの対応が必要で、中高年の段階からのケアというお話をいただきました。単身高齢者向けにつきましては、あんしんコールや配食サービスといった事業をやっているところでございますけれども、中高年の段階では、全体的な取組というよりも、社会的なつながりとなるような老人クラブやおとしより憩の家、札幌シニア大学などに取り組んでいるところでございます。

8 番から 12 番につきましては、大きく、雇用ですとか魅力的な都市づくり関連でのご意見を頂戴いたしました。育児休業やワーク・ライフ・バランス、正規、不正規といったお話でございます。

私どもの取組といたしましては、様々な事業を通じて、例えば、その企業の優良事例であったり、男女で家事を分担する、協働していくといったことをやっていながら、機運の醸成を図っていきたいと考えているところでございます。

正規、不正規のお話については、資料 3 の 6 ページ目になります。就業構造基本調査の数字を引っ張ってきたものですが、上段が全国と札幌市の正規、非正規の割合、下段は不本意だと回答している方の割合になっています。

上段を見ていただきますと、札幌市の非正規割合は全国に比べて少し高い状況にあるところでございます。不本意正規割合も全体的には全国よりも高い傾向にあるのですが、20 代に関してはやや低いところが特徴でございます。

資料 2 に戻りまして、13 番から 17 番では、結婚、出産、子育てに関するご意見をまとめさせていただきました。女性への産後ケア、あるいは女性だけではなく男性へのケア、子育てのプラス面の発信といったご意見を頂戴したところでございます。

例えば、産後ケア事業につきましては、今年度から従来の宿泊型や日帰り型に加えて訪問型の産後ケアを開始する予定で助産師が直接お伺いして相談や助言等を行うものがございます。資料 3 の 7 ページについては、子育て世帯に対し、産後 4 か月までに特に重要だと思っているサポートは何かというアンケートを取ったものになります。

上位を赤枠で囲んでおりますが、今申し上げた専門職による家庭訪問や母子のケアが大事であるのもさることながら、家事などのヘルパーのニーズがかなり高いことが見えてき

ており、前回も似たようなご意見を頂戴したかと思しますので、そのご意見も踏まえて今後に生かしていきたいと考えているところでございます。

18番から20番は、プランの内容や札幌の良いところを若い世代に発信していく必要があるとか、小さい頃から子育てのイメージを持てるようにしたほうがいいというお話をいただきました。こちらにつきましても、先ほどのとおり、いろいろなツールを用いながら皆さんに伝えられるような事業ができればと思っているところでございます。

21番は、外国人材に選ばれる環境という視点は重要ということで、今日のお話にも関わるところでございまして、後ほど改めてご説明したいと思っております。

少し駆け足ですが、前回の振り返りでございました。

それでは、今日の本題でございまして、さっぽろ未来創生プラン（案）の概要ということで、資料4をご覧ください。

全体の構成で言いますと、前回の1回目でご説明した内容から大きく変えているものではございません。大きく人口ビジョン編と総合戦略編があり、総合戦略編の中に幾つかの柱が立っております。今日は、総合戦略編のご説明をした上でご議論いただきたいと思っております。

1ページ目、2ページ目については前回もご説明した内容ですけれども、おめくりいただきまして、2ページ目の左側中央にありますように、目指すべき将来の姿を改めて整理いたしました。

7点ございまして、職場・家庭などにおいてジェンダー平等が実現している、観光・スポーツ・文化芸術などの面で、札幌市の魅力が一層高まっている、結婚・出産・子育ての不安を緩和する支援や保育サービス、家計負担の軽減に向けた支援が充実し、結婚、出産や子育てに関する市民の希望が実現している、子育てをする市民が子育てを楽しみながら生き生きと暮らしている、若者がより一層札幌市の魅力・特色を感じている、若者が心や体の健康を正しく理解し、自分らしいライフデザインが描ける環境が整っている、高度人材などの雇用の受け皿となる企業が成長しているを掲げ、私どもといたしましては、現状、この未来創生プランをやっていく中でこういった札幌市になればと思っているところでございます。後ほど、こういった観点や姿が必要ではないかというご意見を頂戴できればと思っているところでございます。

2ページ目下段は総合戦略編の構成でございまして。人口減少を緩和していきましようというこれまでの取組に加え、札幌市の人口は既に減っておりますけれども、その中でも適用していく取組を徐々にやっていく必要があるのではないかとということで、人口減少適応プロジェクトを新たに掲げたところでございます。それぞれが3本の柱になっておりますので、順にご説明していきたいと思っております。

3ページ目では、将来の姿の実現を目指して、人口減少緩和戦略の1本目の柱として、質の高い雇用創出と魅力的な都市づくりということで事業を掲げております。3ページから4ページの途中までが雇用の関係、4ページの途中から5ページには結婚・出産・子育て

てを支える環境づくりの取組を並べております。6ページ目では、若い世代へ向けたアプローチの強化ということで新しい柱を立てております。

こちらについて、かいつまんでご説明したいと思います。

まず、3ページ目の産業の基盤づくりと競争力の強化の項目でございます。

新しいお話として、GX投資の推進や、今日も新聞報道がありましたけれども、半導体関連作業について取り組んでいくこと、また、IT産業への支援、スタートアップ創出、企業立地のほか、新技術開発や中小企業への支援といった市内企業の付加価値の向上を目指す取組を行っていきたいと考えております。

2点目の働きやすい環境づくりと人材育成・確保でございます。

ワーク・ライフ・バランスに取り組む企業の支援や、道外からのUIJターンの促進、札幌だけではなく、近くの圏域の企業への就職促進のための奨学金返還の支援、人材確保に向けた人手不足業界への対応、様々な分野の人材育成、高齢者の活躍推進などを掲げているところでございます。

3点目の行きたくなる・暮らしたくなる魅力づくりでございます。

国内外からの誘客推進や、観光資源の充実、MICE、雪と共存したまちの魅力向上などを掲げております。

また、下段ですが、観光客の満足度もさることながら、その受入れ体制、最近ではオーバーツーリズムなどと言われておりますが、そういったものへの対応、あるいは、スポーツ、文化振興、みどり豊かな都心づくりなど、訪れる人や住む人にとって魅力あるまちとしていきたいと考えております。

続きまして、右ページの結婚・出産・子育てを支える環境づくりです。

1点目の子どもを生み育てる世代への切れ目のない支援では、若者の出会いの場づくり、不妊治療に際しての費用助成、また、先ほどもご説明しましたが、産前産後のケア、子育てに関する不安の緩和、さらに、子育て環境といたしまして、保育人材確保の取組や多様な保育サービスの提供、放課後の居場所の充実、それから、医療費助成についても来春には高校生も含めて拡大していく予定であるほか、第2子以降の保育料無償化などについても取り組んでいくところでございます。また、ひとり親家庭等の経済的負担も軽減していきたいと考えております。

2点目の子育てを支える地域社会の形成では、前回もお話が出ましたが、孤独の「孤」と書いて孤育て、こういったものを防ぐための地域の子育て支援、特別支援教育に係る相談体制の充実、子育て支援施設の運営といったものを掲げております。

3点目の子どもが健やかに育つ環境の充実では、多様な学びを促す充実した教育環境の整備として、体を動かす機会の充実、また、子どもを支える環境の充実では医療的ケアのお話、子どもを守る体制の充実ではスクールカウンセラー、経済的困難を抱えた子どもへの支援では経済的支援などを行っていきたいと考えております。

6ページ目ですが、若い世代へ向けたアプローチの強化ということで新しく掲げました。

(1) の様々な出会いの創出では、大学との連携ということで、大学が地域とつながる取組に対する支援をしたり、最近、報道等でも出ておりますけれども、結婚支援センターなど、若者の出会いの機会をつくれるような取組をしたいと考えております。

(2) の若者に選ばれる札幌づくりでは、1点目に官民連携の推進を掲げておりますけれども、最近、動きがあったのでご報告いたしますと、北海道博報堂さんと連携いたしまして、大学生と若手社会人でワークショップをやらせていただきました。若者の道外流出に対して考えるということで、いろいろなご意見を頂戴したところでございます。

また、下から2点目のまちづくり・ライフデザインに関する意識の向上では、北海道大学さんでやっていただいている妊娠、出産、育児等に関する情報の普及についてのアプローチにも取り組んでまいりたいと思っております。

最後に、7ページ目の人口減少適応プロジェクトでございます。

大きく3点の取組をしていきたいと考えておりまして、1点目の市民が幸せになるための取組の強化では、札幌Well-being指標というものをつくっております。

いわゆる主観的指標でございまして、アンケートのような形で、市民の方に設問に回答していただき、①の自分らしさから大きく6点ありますけれども、それぞれどういったところが今の自分の幸せポイントなのかを実際に数値化、可視化して体感してもらうとか、全体の集計もできますので、今の札幌に足りていないのはどんなところかというのも全体として見ることができます。

また、全部の数値を上げていくためには市民一人一人の数値も上がっていかねばなりませんので、そういったところも市民の皆さんに伝えていけるような取組になればと思っております。さらに、先ほどの地域社会の寛容性みたいなものも、⑤になりますけれども、こういったところで見えてくるといいなと思っております。

それから、右側上段の外国人材に選ばれる環境づくりでは、前回は人口の概要のところでご説明しましたけれども、生産年齢人口がどんどん減っていくことが分かっておりまして、その中で、外国人材にも札幌に来ていただいて働いてもらうことが一つ大事なポイントだと思っております。そのために、今後、何をしていかなければならないのかというのが行政としても課題の一つであると認識しておりますので、外国人に向けた情報発信、また、多文化共生等の推進などにも取り組んでまいりたいという整理をしております。

最後に、持続可能な都市の在り方の検討ということで、これまでは、比較的、こんな取組をやっていきますとか、こんな事業ですということをご説明したのですが、全体に関する話なので、概念的な項目になってしまうかと思いますが、記載のとおり、税収減や担い手不足といったことは、今もそうですし、これからはさらに大きくなっていく問題なのかなと思っておりますので、市民サービスの維持・向上をしていくためにも、様々な観点がある程度長期的に考えていかなければいけないというふうに私どもは認識しております。

検討に当たっての様々な視点ということで、デジタル化の推進による生産性の向上ですとか、行政サービスの水準や受益者負担というのは、新しい社会の中では変わっていかねばいけいけいではないのかとか、同様に公共施設についてもどういった在り方がいいのか、税源をどうしていったらいいのか、こういったことをある程度長期間にわたって考えていかなければいけいけいと考えております。

それも、今までのように、案件ごとに、ここの部署で、ここの部署でというよりは、全体を通してやっていかなければいけいけい、組織横断的なことを考えていかなければいけいけいとか、行政だけではなく、多様な主体と一緒にやっていかなければいけいけいとか、それをやっていくためには、その下支えとして共同研究的なことをやっていかなければいけいけいということを考えております。

例示として項目を挙げておりますけれども、分かりやすい例で言えば、ごみ収集です。これからは収集される運転手さんが減っていくかもしれない中で、そうとは言いながら、ごみをあふれさせるわけにもいかず、どうやって集めていったらいいのか、どういった形でやっていったらいいのかということです。除排雪も一緒に、実際に運転されている方がいらっしやいますが、その方々も高齢化が大分進んでおります。その方々が実際にリタイアされたときにはどういう形でやっていったらいいのかということについては長期的に考えていかなければいけいけいというふうに考えております。

このさっぽろ未来創生プランの中で全部をこうしていきますというのはなかなか難しいのですが、そういったことをちゃんと考えていかなければいけいけい私どもは認識しているところがございます。

もう一点だけご紹介させていただきます。資料5でございます。

情報提供といえますか、ご報告でございます。

北海道総合研究調査会、通称HITと申しますが、地域における総合的な少子化対策の立案・実施に向けた人口動向分析と対応策に関する研究を受託されて、この夏ぐらいから始められております。その中のモデル地域として札幌市になってもらえないだろうかというお話をいただきまして、まさに今、やっているところでございます。札幌市のほか、山梨県、大分県臼杵市がモデル地域になっていると伺っております。

具体的な中身といたしましては、協力内容のとおりです。私どもで体制をつくったのもさることながら、2点目にありますように、働きやすい環境づくりなど雇用環境に焦点を当てた研究をしたいというお話をいただいておりますので、札幌市内の企業ではどういうことをやっているのかということで、企業経営者へのインタビューをされたり、実際に地域で子育て支援をしているNPO団体からヒアリングをして、どういったことができていのか、やっているのかということですか、あるいは、札幌市も結構大きな組織でございますので、市職員の働き方や育児休業等に対する現在の意識や制度に対する考え方、そういったものの調査をやろうとしているところがございます。

その中でも企業経営者インタビューは少しずつ進んでおりまして、市内企業についてあ

る程度の数のインタビューをしているところでございます。社員が数名から1,000人以上になるような企業ですとか、業種もコールセンターや運輸、食品や建設など、いろいろな企業にお話を聞いていただいているところでございます。

まだ取りまとめ中なので、結果報告はできないのですが、職場環境の改正に向けた取組や働き方など、多様性を踏まえた雇用などについて、企業の創意工夫や現状をお伺いしているところでございます。

この研究のアウトプットですけれども、下段にありますとおり、人口減少・少子化の要因把握、それから、どんな対策が有効なのかが把握できるようなロジックモデルを構築したいというふうに伺っております。

また、先ほどもちょっと出ましたけれども、行政だけではなく、企業や地域、場合によっては市民が人口減少問題を自分事として取り組むためのプロセスを整理したいと伺っております。

2年度をかけてやっていくというお話ですので、この未来創生プランの中にすぐ入れていくことはできないかもしれないですが、お話の中身であったり実際の運用の中でこの共同研究についても取り込んでいきたいと考えているところでございます。

長くなりましたが、私からの説明は以上でございます。

4. 委員による意見交換

【玉腰座長】

量が多いところをまとめていただき、ありがとうございます。

それでは、今ご説明をいただきました内容について皆様と意見交換をしていければと思います。

活発にお互いの意見が反映されていくよう、ご意見を受けて、次の意見という感じでつながるものから順にお話をいただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

まず、最初の説明にありました前回の話を受けての資料2と資料3については、よろしければパスしたいのですが、特段、確認事項はありませんか。もしあればご遠慮なく言っていただければと思います。

【入澤委員】

A3判の資料を見ますと、前回の私の質問に対する回答も書かれていて、非常に分かりやすかったです。また、改めてこのグラフを見たらすごいなと思いました。

例えば、4ページの人口1,000人当たりの離婚数と合計特殊出生率で見ると、離婚が多いと出生率が低いという相関関係が札幌や大阪では如実に出ていないかと思っています。そう考えますと、できるだけ家庭が幸せであってほしいというのは出生率に関わってくるのではないかと思うのですが、それがプランのどこに入っているのか

が読み取れなかったです。

女性の活躍はもちろんあるのですが、家庭環境を良くしていくことに対する施策みたいなものが見当たらなかったのですが、あえてなくしたのでしょうか。

【田村企画課長】

一般的には、例えば金銭面といいますか、経済的な支援も多少はあるかと思うのですが、具体的に家庭の中に入り込むというところまではあまりできていないと言いますか、中々難しいところです。ウェルビーイングに関する取組については、「つながり」という項目もあり関係する話かなとは思いますが。

【入澤委員】

確かに難しいなと思いつつも質問しています。

それから、前は、男女の出会いの場といったことも結構あったと思います。出会いが結婚につながるかどうかは分からないですけども、出会い方もあるのかなと思います。それが抜けたのかなと思うのですが、そんなことはないですか。

【田村企画課長】

資料の4ページの若者の出会いの場づくり、6ページ目の若い世代へ向けたアプローチの強化の中の様々な出会いの場の創出というところで、学生や若者の活動を支援していく中でいろいろな主体とつながっていき、出会いが生まれたら良いと考えております。

ダイレクトに言うと結婚支援センターの取組も最近始まりまして、それ以外のところとしては、色々な若者が人とつながることで社会課題の解決につながるもののほか、個人としてもつながりを持っていただいて、そこから出会いにつながっていけばいいのかなと考えているところです。

【玉腰座長】

最初のお話にあった家庭が幸せというのは、必ずしも男女だけではなく、いろいろなパターンもあると思いますし、この後のご意見の中でもし何かあれば出していただけるといいのかなと思いました。

そのほかになれば資料4に入りたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

【玉腰座長】

非常に多岐にわたりますので、話をどうつくっていくかは難しいと思います。まず、どなたかに口火を切っていただき、そこから話を始めたいと思います。

資料4の3ページ以降の新しい戦略のところについてです。

人口減少緩和戦略に関しては、必ずしも新しいものだけではなく、今までもされてきたことも多いと思いますけれども、こういう形で整理をしていただきました。

いかがでしょうか。

【浜中委員】

3ページの質の高い雇用創出と魅力的な都市づくりのところでお伺いしたいことがあります。

平均年収みたいな議論がここにはあまり出てこなかったと思うのですが、多分、今、札幌はそんなに高くなく、300万円ちょっとぐらいの状況かなと思います。でも、300万円ちょっとで子どもを2人育てられるかを考えると結構苦しくて、それでは共働きだねとなりますと、子どもができたときにどちらが育てるのか、年収が半分になるのかみたいな話になってくると考えます。平均なのか中央値なのかはあると思うのですが、何とか400万円に上げるにはどうすればいいかという議論があってもいい気がします。

また、産業を考えたときも、従業員への還元率が高い産業もあれば、ここの売上げが変わっても北海道や札幌の外に流れていく率が高いよねみたいなものだったら、必ずしも売上げが上がればみんなが幸せになるかということそうではないと思います。そのときに、どういう産業を札幌で増やしていくと働く人たちが生きやすくなるのかということは議論の中に入ってきてもいいかなと思います。

これは入澤委員にも聞いてみたいです。

【玉腰座長】

ご指名がありました、いかがでしょうか。

【入澤委員】

同じように思います。

平均年収もそうですけれども、リビングコストが東京とは違うというところもあるので、可処分所得といいますか、そういう指標がいいのかなと思います。いずれにせよ、ビジョンなので、金額目標みたいなものがあるのもいいのかなと思います。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【岡田委員】

今、年収の話があったかと思うのですが、うちのサークルの博士の先輩で、将来、結婚はしたいと考えているけれども、博士としてお給料を得るという中で子どもを育てるだけ

の給与がもらえるのだろうかという不安があるということがありました。ですから、収入を上げていくというのは持続可能な札幌につながっていくことだと捉えています。

【山口委員】

今、収入のお話がありました。3ページの人口減少緩和戦略の(2)のワーク・ライフ・バランスの推進についてです。

労働者の賃金をしっかりと確保していくということは、最終的には生活が安定、向上していくということにつながりますし、人手の確保にもつながっていくと感じています。

収入で比較すると、同じ仕事でも高いほうに行ってしまうたりします。労働力の安定ということを考えたとき、仕事に定着をしていただくことの観点で考えても、賃金についてはそれなりの水準を持ったほうがいいのではないかと私は思っています。それで、安定して仕事に就いていただいて、札幌にそのまま住んでいただいて、その収入で札幌の中で生活をしていくという循環が生まれるのかなと感じています。

今、人手不足の話をしてきましたが、どの業態でも非常に厳しい状況が生まれていると思っています。その原因の一つは人口減少の問題だというのは間違いないことですが、市民サービスにも影響が出てきていると思います。昨今ではバスの減便などがありましたが、そういうところへ影響が出てきているのかなという感じもしています。

人口流出を最小限に食い止める、緩和していくということでは、まず安定して札幌で仕事をしていただけるという環境をつくるのが大事で、その一つが賃金でありますし、例えば、労働条件の中でもワーク・ライフ・バランスをきちんと築ける取組も必要になってくると思います。

もう一つは、働きやすいまち札幌というところにも書いてありますけれども、経済界、労働界、札幌市の3者の協議会での取組での様々な対応方針の検討とありますので、例えば、こういうことをやっています、こういうことに取り組みましょうという行政側からの市民への発信も非常に重要になるのかなと感じています。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【権平委員】

おっしゃるとおり、人手不足はこの業界でもあると思います。

成長戦略でいきますと、次世代型産業を見据えた創業・開発支援と企業誘致というところで、いわゆるGX、半導体が新しく北海道の経済を担っていくと思いますし、そうした業種としてラピダスが当てはまると思うのですけれども、まさにそういったところから人、物、金を呼び込んで、ひいては定住人口の増加につなげていく必要があるのかなと思うのです。

国策に近いものではあるかと思うのですが、これだけ大きな産業が北海道に来るのは千載一遇のチャンスだと思っています。千歳市ではありますけれども、札幌市も近隣都市として、定住人口の増加、ひいては生産労働人口の増加ということで、札幌市としてもここにもうちょっとスポットを当てて盛り上げていくという施策が何かあってもいいかなと感じました。

【玉腰座長】

今の時点で事務局から何かございますか。

【里政策企画部長】

この資料ではさっと1行での書き込みとなっていますが、私どもでもラピダスの立地を契機として、札幌まで、あるいは、札幌だけでひとり占めするという事は私も思っていませんので、広域的にいかに産業発展に結びつけていくかには力を入れてやっていきますし、恐らく、本書ではもう少し書き込んでいくことになります。

【玉腰座長】

雇用の話から離れても構いませんが、ほかにいかがでしょうか。

【丸山副座長】

今の千歳の話についてです。

少しネガティブな見方になるかもしれませんが、先日、ニュースか新聞記事で見たのは、熊本に台湾の半導体会社が入ってきて、ラピダスはそれに似ているみたいな話がありました。熊本では有名なラーメン店が人気だったのに撤退するというニュースがあって、その理由を見ますとアルバイトが全然集まらなくなってしまったからだそうです。時給1,300円を出しても全然集まらなくて、それよりも多くの時給を出す外資のアルバイト雇用がいっぱいあるので、中小企業はもう無理ですと言って撤退してしまうことになったそうなのです。

ラピダスは外資ではないので、事情は少し違うとはいえ、恐らく、景気の高揚感も千歳のほうで出てくると思います。その中で、より条件の良い雇用環境が急速に提供される、それが大企業を誘致した場所の特徴だと思うのですが、千歳に人が集まっていくと思います。しかし、その千歳でどうしても居住場所が確保できない、あるいは、雇用を得られなかった人が札幌にやってくるみたいな、住民の性質的な違いで居住分化が起こってくるようなこともあり得るかなと思っています。

これは札幌圏という圏域で見た場合には少し場所が変わったぐらいの認識になるかもしれないのですが、札幌市という単位で見た場合には決してプラスではないことも起こってくるのかなと思うのです。

そういうことに関して、総合計画や創生プランの中でラピダスが来る影響についての対応といいますか、それを明示するかどうかは分からないのですが、何らかの検討した結果というのは書いておいたほうがいいかなと思いましたが、人口減少対策としてもあり得るかなと思います。

【玉腰座長】

事務局でご検討をお願いしたいと思います。

もちろん、ネガティブな事象もきちんと確認する必要があると思いますが、違う側面から見たらポジティブに捉えられるのではないかという考え方もあると思いますので、できるだけ明るい未来が描けるようになればと思います。

いかがでしょうか。

【柴田委員】

今の話を聞いて、丸山副座長のご意見に乗っかることになるのですが、企業誘致の弊害もあるなと思っています。

浜中委員がいいスタートの議論をしてくださったなと思っているのですが、今、問題になっていることは、漠然とした不安だと思うのです。子育て世代でどれぐらいの世帯年収があると何人ぐらいの子育てを不安なく行っていくことができるのかという数値化がなされていくといいのかなと思っています。

例えば、夫婦2人を合わせて年収が800万円あるとこれぐらいの生活をこのエリアではできますよ、あるいは、可処分所得に関しても、札幌のこのエリアでこのような生活をしていくとこれぐらいの支出がありますから、この年収でこの支出だとこれぐらいの利益が1年間で残りますよね、だったら暮らしていけるよねというような伝達が必要かなと思いました。

それを行うことによって、現状の平均年収が300万円だとしたら、350万円まで上げることによってこれぐらいのインパクトが残せるのではないかという話になると思うのです。それぐらいだったら、札幌に既存で根づいてくださっている企業への短期的な補助金や助成金の制度をつくることによってそこを達成できるのではないかという地場のエンパワーメントみたいなことが必要で、それを実現していくプロセスの中で企業誘致などの施策が必要だと思っています。

ですから、この順番が非常に重要かなと思って聞いておりました。

【玉腰座長】

具体的な示唆をいただけたかと思いますが、ほかにいかがでしょうか。

【岡田委員】

今の企業誘致の話からは少し離れてしまうのですが、必要な金額などの正しい情報を伝えるという話題が前回も上がっていたと思いますし、若者の漠然とした不安感を払拭するための施策が必要なのではないかと考えております。

私たちのサークルの中でも、子育てに必要な金額のイメージが現実と離れているのではないかと、差が生まれていて、本当の金額よりもさらに高い金額が必要だというイメージがついているのではないかと、それで年収が低い男性が結婚しにくい状況であったりするのではないかとという意見が挙がりました。ですから、正しい情報を若い世代に伝えることが必要だということです。

また、先ほどおっしゃられていたように、このくらいの収入があればこうやって生活できるというモデルがあると若い世代にも現実感を持って伝わりやすいのではないかと考えています。

【玉腰座長】

前回は、子育てのイメージがなかなかうまく伝わらないというか、いろいろな形の情報が逆に広がり過ぎているのではないかとというご指摘があったと思いますけれども、そこに通じる話かと思えます。

では、子育ての話に行ってみましょうか。

雇用は子育てにもすごくつながることですけれども、具体的に今ご提案をいただきました4ページや5ページでお気づきの点やこういう視点が必要ではないかというものがあればご意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

【入澤委員】

質問ですが、児童手当というのは札幌市の税金から出ているのですか。それとも、国のお金が札幌を通じて流れているのか、どちらなのでしょう。

【里政策企画部長】

基本的には国と地方自治体でお金を出している形になります。

【入澤委員】

さきのニュースで、国の方針では第3子から月額3万円になるということがありますよね。私には子どもが3人いて、妹には4人いるのですけれども、そうなると、第1子が月額1万5,000円、第2子が1万円、第3子から3万円になるということで、月額9万円がもらえるのですよ。そうなると結構な額だなと思うのですね。これは国がやるのだけれども、さらに市が補填する、さらに出してあげられるようなことができるのかなと思います。

僕がずっと思っているのは、ここに体を動かす機会の充実と書いてあるのですけれども、

今、実際にはこれがないのですよ。例えば、サッカーや野球を習えないという子たちが多いのです。それは、中学校の部活でいうと指導する学校の先生がいないということがありますし、この中学校に入ってサッカーをやろうと思ったのにサッカー部がないなどで、最近、こういう経験格差が結構あるなど実感しています。ですから、どの小学校やどの中学校に行ってもやりたいスポーツややりたいことをできるという環境をつくる必要があるかなと思います。

今は夏の公園では暑くて遊べない問題も非常にあるかなと思っていますので、もう少し水辺で遊べるところを増やしてあげるなど、市としてやれることはもうちょっとあるのかなと思いますし、体を動かす機会の充実というところでは、もうちょっとそういうサポートがあってもいいのかなと個人的には思います。

【玉腰座長】

ほかにいかがでしょうか。

【高橋委員】

私は、今、2歳の娘を育てながら仕事をしており、毎月、ゼロ歳児ママ会というイベントをやっております。10名から20名ほどの札幌市内に住むゼロ歳児のママと毎月お話をする機会があるのですが、その中でよく出てくるのが遊ぶ場所がないという問題です。

赤ちゃんを連れていけるような場所として地域の子育て支援センターがあると思うのですが、そこはコミュニティーが既に出来上がっていて入りにくいということがあるのです。また、狭過ぎるといいますか、人数制限があってなかなか入れなかったり、時間の制限があったりということでもなかなか行き場所がないという問題があったりするのです。

特に、赤ちゃんを抱えて外に出る機会が冬になると減ってきてしまうのです。夏は公園などにお散歩へ行ったりできると思うのですが、冬に遊べる場所が本当にありません。

今、私は2歳の娘がいますけれども、2歳の娘を抱えて行ける場所は数少ないので、そういった場所が増えることでも安心して育てられる環境づくりにつながるかなと思っていますので、もう少し遊べる場所を増やしていただきたいと思っています。

【入澤委員】

同意します。冬に子どもが遊べる場所がないのです。

僕は、子どもが小さい頃、札幌ドームに物すごく助けられたのです。札幌ドームのキッズパークに何回行ったことか、札幌ドームはそういう使い方をしてほしいです。本当に市民のための施設とするのであれば、ドームを開放して芝生を敷いて子どもたちが遊べるようにしたり、滑り台を置いたり、冬でも公園みたいにできるというのが札幌ドームの使い

方だと僕は思います。

赤字が何億円だとか、関係ないという話ですよ。僕らの税金なのだから、もっと堂々と税金を使って、子育てのために札幌ドームを開放しますというのが在るべき姿なのではないかと個人的に思います。

【玉腰座長】

同意のご意見があればどうぞ。

【浜中委員】

僕も激しく同意します。

また、夏休みや冬休みは小学生が2人とかいるとしんどいないつも思うのです。夏休みが始まる時は妻と決起会をやって、夏休みが終わったときにはお疲れ会をやるというくらい行かせる場所がないということがあるので、時期に合わせてこういう場ができるということでもいいと思うのです。年間スケジュールで幼稚園、小学校、中学校とかでどのゾーンにボリュームゾーンがあるのかを確認しながらできるといいなと思います。

多分、小学校単位だと難しいので、区単位やエリア単位で分け、そこにサッカー部があるよ、水泳ができるよとなっているとありがたいなと思います。

【柴田委員】

結婚はしているものの子どもはいないですが、、同意します。

E-LINKというNPO法人がありまして、そのの理事を担っているのですが、今みたいな大きな話と同時に小さな話も必要かなと思っています。創成川のイーストエリアで活動しているのですが、そのの頓宮を活用させていただきながら寺子屋事業みたいなことをやっています。

大事にしていることは197万人もいる札幌市の都会の中に田舎がつかれるということで、学校から家に帰ってくるときにカフェのおじさんなどと今日は学校は楽しかったかというようなコミュニケーションが取れるような環境づくりだと思い、そういう取組をしているのですが、区単位で冬にお寺の頓宮の中で配慮はしつつ走り回れるよなど、区の中で子どもたちが遊べる場所を用意してあげるというマイクロな動きと札幌ドームのようなどころでの大きな動きを両方とも試行しながら実践していく必要があるのではないかと思います。

実際を取組を交えての共有でした。

【玉腰座長】

子育てが楽しく行われていると、ほかの人もそれを見て、子どもを産もうと思うかは分かりませんが、一緒に参加しよう、一緒に子育てをしていこうという雰囲気をつく

られていくと思いますので、すごく大事な視点だと思いました。

そろそろ猪飼委員がお時間かと思いますが、何かご発言をお願いできますか。

【猪飼委員】

今のスポーツなどの話についてです。

私の子どもは高校2年生と中学生になりましたが、スポーツをやらせるためには送迎がむちゃくちゃ大変でした。

うちの下の子はレバングのU12に入っていたのですが、中央区から厚別区まで送るのに冬場だと片道50分かかります。そして、2時間か3時間か練習して戻ってくるみたいな感じで、ガソリン代もばかになりませんし、費用と時間を2人で分担して割かないとさせてあげられないのですよ。

札幌市では、厚別区で厚別アスリートアカデミーというものをやっていて、冬休みの期間に厚別競技場を使ってウインタースポーツを体験できますよね。あれは送迎込みだったと思いますが、ああいうものが増えるとむちゃくちゃいいなと思いますし、ああいうものを、子どもを育てる世代に還元できるような仕組みができれば物すごくいいなと思っていました。

私のところでは、子どもが中学生になり、1人で行けるようになりましてけれども、もっと小さいときからそういう環境が札幌市全体にあればなと思います。

そして、厚別アスリートアカデミーについてですが、今、厚別競技場は改修中ですが、民間の私が所属していたところが連携してやっているような陸上とサッカーのクラブがあったのですね。ああいうものをもっといろいろな種目やいろいろな場所でできるといいなと思います。札幌市は本当に広いので、移動の問題はとても大きく、エリアごとの差も大きいと思うのですが、そういったものが解決できるような体制ができればいいのかなと思いました。

【玉腰座長】

子育ての話から遊ぶ場所や体を動かす場所の話に限定されてきてしまったので、広げたいと思います。

そのほか、子育て、あるいは、妊娠や出産を含めて、地域の安全・安心についてお気づきの点や足りていないという視点から何かあればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

【丸山副座長】

子育ての話とは別の視点になるのですが、子育てをしていない人の視点がすごく弱いというのが正直な感想としてあります。これは、札幌市だけではなく、国の施策の書き方もそうなっているのですけれども、結婚のことはあまり言わなくて、子育て支援

なのです。

ただ、全国的に見て、国立社会保障・人口問題研究所の出生動向基本調査というものは、単身者の結婚する意思を調査するのです。いずれ結婚するつもりと一生結婚するつもりはないという2択の選択肢で、いずれ結婚するつもりという方が9割ぐらいいるからということ根拠に希望出生率が1.8という数を出しているのですけれども、それが実際には下がっていつているのです。

一生結婚するつもりはないという回答をする人が増えている事実があって、結婚はしない、子育てはしないと積極的に選択する人は間違いなく存在しているわけです。

それと同時に、結婚する意欲はあったのだけれども、結果的に結婚できないで歳を重ねてしまい、中高年という高齢者が入ってしまう印象が出るのですが、40代や50代ぐらいの中年層で、これから結婚することは見通せない、あるいは、結婚したとしても出産は見通せないような人たちが非常に増えているという紛れもない事実もあります。そうした人たちに対して暮らしやすい環境をどう提供していくかという視点がごっそり抜け落ちてしまっているなというのが正直な感想です。

先ほど申し上げたように、札幌市だからないわけではなく、国全体としてそういうことを全然言っていないのです。子育てに関して言うと、今、子育てしている方々に対するものもあれば、将来的に結婚して出産しやすい社会にしましょうという潜在的なものに対するアプローチが含まれていると思うのですけれども、中高年の単身者はもう既にいますので、その人たちに対するアプローチはしっかりと練っておかなければいけないなと思いましたが、そこを入れたほうがいいかなと考えます。

【玉腰座長】

前回のときに資料を見てみんなで愕然とした記憶がありますが、大学生はこんなに結婚する気もないのかと思ったら、岡田委員にそんなものですよと言われて、そうかと思いました。でも、そこも本当に重要だと思いますので、どういう札幌市をつくっていくかという点で検討すべきかと思います。

猪飼委員、どうもありがとうございました。

【猪飼委員】

ありがとうございました。お先に失礼します。

【玉腰座長】

それでは、続けて話をしていきたいと思います。

今のことやその次の若い世代に向けたアプローチの強化についてご意見はいかがでしょうか。

【柴田委員】

話し過ぎていた印象ですけれども、U35-SAPPOROというおおむね22歳から35歳の集まりを2022年5月から始めまして2年がたちました。スラックというコミュニケーションを活性化させるようなツールがあるのですけれども、それに100人ぐらいのメンバーが所属していて、今、何をしようかと思っているかといいますと、まちの同期という存在の認識をしてもらおうと思っているのです。

197万人の人口を有する市なので、職場と家以外での関係性の構築がなかなか難しいなど思っています。札幌市に残りたい、この会社に残りたいという大きな理由の一つにこの人たちと一緒に時間を過ごしたいからという要素があると思うのですけれども、22歳から35歳の層ではその実現がなかなか難しいなど思ったのです。

ですから、今、U35-SAPPOROというものを通じて、札幌市の同期、その世代の同期として、同じ世代でこのまちに居合わせ、何かしらの思いを持って活動している人たちが出会い、接点を持ち、つながっていけるような環境づくりをしているということですが、組織内や家庭内を飛び越えたつながりを作っていくということでお互いを助け合える環境づくりにも寄与していくのではないかと考えて動いております。

【玉腰座長】

ありがとうございます。

大谷委員、申どのような話でも結構ですので、ご発言があればお願いいたします。

【大谷委員】

オンラインで失礼いたします。大谷でございます。

雇用の創出のところで感じていたこととして、例えば、UIJターンや企業支援についての施策はされているのですが、そこに子育てしやすい札幌についてのPRがあまり見えてこないなど思っていました。

札幌UI就職ナビというホームページがありまして、UIJターンを希望される方と企業のマッチングをするプロジェクトだと思うのですが、そこで子育て支援についてどういうふうに言及されているのかと思って見てみたら、まず、「札幌で暮らす」というページを開けて、一番下までスクロールしていくと、申し訳程度に子育て支援のことが書いてあるぐらいでした。

大都市圏から札幌に移住してこられる方は、子育て環境やワーク・ライフ・バランスを求めてこられるという側面もあると思うので、そこはもっと見やすいような形でPRできたらいいのかなと思いました。雇用の創出と子育て支援というのは、縦割りでなく、もっと連携してPRできたらいいのかなと感じておりました。

【堀井委員】

今のUIJターンのことに関連したことです。

最近、首都圏の企業の方々と話していると、フルリモートという働き方が相当広がっているということでした。これは、IT関連の企業だけでなく、フルリモートまたはリモート中心の働き方を選択する方が増えていていきますので、札幌もこうしたチャンスを生かしていくべきだと思っています。

3ページのUIJターンの促進やワーク・ライフ・バランスに取り組む企業への支援に関わることで、それも想定していらっしゃるのかなと思うのですが、フルリモートの方が札幌に移住したくなるような環境づくりが大事だとも思っています。

もちろん、現在、コワーキングスペースの整備に札幌市も取り組まれていますけれども、もっとPRしてもいいのかなと思いますし、今、大谷委員がおっしゃったように、そういった技術者の家族の方に向けた支援がどの程度行き届いているかなどのアピールも併せて行っていくとよりいいのかなと感じています。

【岡田委員】

私もフルリモートの方向けの施策を打つことは非常に効果的だと考えています。というのも、私の周りでも、例えば、大学への入学を機に札幌に来て、札幌に残りたいという気持ちはありつつ、結婚を考えたとき、相手と別々の場所で働くことになってしまうということを危惧しているということがあります。このように配偶者との居住地が違うということも結婚の障壁になっていたりするので、そういうときにフルリモートで自分の好きな場所で働くという選択ができることが大学生にも、そして、道外の人にももっと伝わっていくと効果的なのではないかと感じています。

【玉腰座長】

今のお話は、6ページの(2)の若者に選ばれる札幌づくりにも深く関わってくるかと思いました。若い方がたくさん参加されていますが、ここに書いてある以外でもこんなことがあったら選びたくなる、こういう視点がもっと入っていたらいいのではないかというものがあれば、ぜひご意見をいただきたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

【高橋委員】

今、フルリモートのことで学生やこれから結婚していく方向けの話があったと思うのですが、子育て世代のママにとってもフルリモートはとても効果的だと思っています。

最初に世帯年収の話があったと思うのですが、年収を上げるためにはママが働くことに対する必要な施策だと思っています。ただ、今、ママが働くとなりますと、自分を酷使するしかないのです。保育園に送って、ダッシュで会社に行って働いて、急いで迎えに行って帰ってきて家事をする、その間に頑張っている仕事をしている感じで、命を削り

ながらやっと働ける現状なのです。もしそれがフルリモートでかなうのであれば、今からでも働こうかなと思えるママはすごくたくさんいらっしゃるのです。

現状、オンライン秘書として働こうとしているママが私の周りにもすごく多くて、そのために学びをしている方々もいらっしゃるのです。そういったサポートは世帯年収を上げるという面でもすごく有効なのではないかと思っております。

【玉腰座長】

そのほかよろしいでしょうか。

【浜中委員】

若者のところについてです。

前回は少しお話ししたかもしれないですが、今の大学生たちを見ていると、大学と家とバイト先の往復しかしていなくて、それで4年間生活をして就職していくとなると、札幌に触れる時間がすごく少ない中で選んでいるので、選ばれるというよりは選択肢に入っていない感じなのです。

例えば、北海道大学の学生は7割が道外から来ているので、北大の中で生活し、そのまま出ていくとなったなら、地元に戻るという選択になってしまうと思うのですね。そういう子たちにいかに札幌との関わりや北海道との関わりをつくっていくのかがきっとミッションになってくるだろうなと思います。

年間で言うと百数十日ぐらいしか学校には行かないので、200日ぐらいは夏休みと春休みで余っているので、そのうちの何日か、何時間かでも北海道や札幌と関わるものをつくっていけるといいなと思っておりますし、それを実際にやろうとすると、大学との連携強化は本当に必要だなと思えました。

大学の先生たちとやり取りをすると、どちらの大学が主導権を握るかみたいな水面下での争いがあって、大きい大学は押しつけないでくれよみたいなところもあるので、札幌市、あるいは、道庁などとも一緒に議論をしながら取り組んでいければなと思っておりますし、できれば、それが授業として行われ、札幌市としては15授業分に関わらないと出られませんみたいな感じにできればいいと思います。

ヨーロッパなどだと、2年生まで行くと、1年間、外に出てから3年生に復学しないと2年生から3年生へ進級できなくなっていて、5年かけて卒業をしてくださいとしているのです。すぐには難しいのかもしれませんが、未来を考えるとそのぐらいやってもいいのではないかと思います。

大学生の人口は増えているので、その子たちを札幌や北海道好きにしまえば人口は増えるはずなので、その時間の使わせ方を設計するのは面白いなと思っております。

【大谷委員】

今の意見にはすごく賛成です。

大学生と札幌市、北海道との接点をつくっていただくというのは非常に有効かと思いましたが、それに加えて、例えば、道内や札幌市内のワーク・ライフ・バランスを推進している企業と大学生を引き合わせるというか、紹介するものもあるといいのかなと思いました。

特に、今の若い方たちは、仕事をばりばりやるという価値観の方ももちろんいらっしゃると思うのですが、ワーク・ライフ・バランスを重視して、男性でなくても子育てに関わっていききたいと思っている方が多いのかなと感じています。

ですから、そういう働き方ができる会社が道内にも札幌市内にもあることを大学生のときから知っていただくと同時に、そういう生き方も可能だということをしっかりと伝えていくことで、将来に希望を持っていただくのがいいのかなと思いました。

【岡田委員】

浜中委員の意見に私も賛成で、大学生は大学とバイト先と自宅の往復になっていて、地域とのつながりが本当にないと感じているところです。

生まれ育った地域であれば、地域とのつながりやふるさとみたいな感じがあったと思うのですけれども、大学生はひとり暮らしで、それぞれで暮らしていて、近隣住民とのつながりも別になく、結構孤独に暮らしている人が多いのではないかなと思っています。子育て世代であると地域とのつながりが結構あると思うのですけれども、大学生は地域から隔絶されているといいますか、自分から参加していないと感じてしまっていて、地域とのつながりをどう作っていくのが大切になっていくかなと思っています。

ただ、そのとき、札幌市がイベントを主催して大学生を集めてとなるとどれだけの人が参加するのだろうかを考えるのですが、積極的な人しか参加しないのかなとも感じています。そうなってくると、大学生側が主催や企画するイベントを応援するといいますか、大学生や若者が主体の活動のほうが参加しやすいのかなと思いました。

【権平委員】

先ほどの大谷委員のお話の続きです。

学生と企業が実際に出会う場の提供として、企業の方が学生の講義に出向くというものがあります。我々、北洋銀行では、ワーク・ライフ・バランスに取り組んでいますといった感じで企業側が説明し、学生側も道内にこんな企業があるのだと知っていただく機会の提供に取り組んでおりまして、実際に講義でも説明をしていますし、講義に参加していただく企業集めを我々が行うといったお手伝いもしています。

さらに、先ほど、札幌市では北海道博報堂と同じような取組をされているというお話でしたので、札幌市もそうですし、我々、北洋銀行も地域金融機関としてお手伝いしていきたいと思っています。

【玉腰座長】

ありがとうございます。

時間が押してきてしまいましたので、申し訳ありませんが、最後の7ページに移りたいと思います。

人口が減少するところに適応するという点について、こういう視点も必要なのではないかとこのものがあればお願いします。

【岡田委員】

漠然とした不安感に対し、こういうWell-being指標を設定していただき取り組んでくださっているということで、意見が反映され、ありがたいなと思っています。六つの指標について、各設問を通じて数値化、可視化するということだと思うのですが、気になった点がありまして、⑥の札幌ライフです。

①から⑤の指標は数値化、可視化がある程度できるといいますか、市民が設問に答えるときに自分らしさかなえられているな、生きがいかなえられているなという達成度を自分で測れるものだと思うのですが、札幌ライフというものが設問に答える市民にどのようなものかなえられていると言えて、自分がどういう状態だったかなえられていると言えないのが指標として測りにくいものなのではないかと思っています。

札幌らしい生活、札幌でのライフスタイルというのは①から⑤に共通してあるべき概念なのかなと思っているので、気になりました。

【玉腰座長】

事務局から何かご説明はございませんか。

【田村企画課長】

私どもとしては、名称にあるとおり、札幌らしさを大事にしたいと思っていて、札幌ならではのこんな生活をしている、札幌だからこんなことができているということについて意識してもらいたいということがあり、このような設問をつくったのです。

イメージが湧かないかもしれないので、こんなものですよというものを後日に皆さんにお見せしたいと思いますので、その中でまたご意見をいただけるといいなと思います。

【玉腰座長】

よろしくをお願いします。

ほかにはいかがでしょうか。

【柴田委員】

今の岡田委員の意見に被るもの、そして、外国人について簡潔にお話しさせていただきます。

1点目は、今、リアルなドクターたちと一緒に事業を開発している中で教えていただいた言葉が示唆に富むと思うので共有するのですが、SOAP——サブジェクティブ・オブジェクティブ・アセスメント・プランというものを通じて診療のカルテを出す中で、ビジネスにおいても、医療においても、今一番ないがしろにされているのが主観的情報だという話がありました。

今回、指標を取るに当たっても主観的情報っぽいなというものを指標にしてしまうと変な評価と計画になってしまうと思うので、ちゃんとその人が持っている思いを今回のアンケートなどを通じて引き出していけるといいのかなと思いました。

2点目は、11年近く宿泊・観光業を運営していたのですが、外国人材に選ばれる環境づくりにおいて、受入れ側の教養というか、例えば、アレルギー・ベジタリアン・ビーガン・ハラール対応のハラールとは何なのか、何でこのお肉は食べられないのだろうか、食べなよと信条に反する言葉を言ってしまうなど、そうした摩擦が生じる場面を多々見てきたので、そこにはすごく気を遣ったほうがいいなと思います。

それと同時に、人口減少の問題は、全国の1,718の自治体の中で増やそうとなると、必ず外国人材という話になると思うのですが、単純に外国人を増やせばいいのかというと、そうではないと思うので、このまちにとっての適度な人口、そして、ありとあらゆるものがちゃんと機能する状態とは何なのかを長期的な目線で一緒に考えていけたらうれしいなと思っています。

【玉腰座長】

大事な視点をありがとうございます。

【入澤委員】

この札幌Well-being指標のプロジェクトをホームページで探したのですが、今年の3月ぐらいに決まったのですか。

【田村企画課長】

そうです。調査研究を去年1年でやりまして、その中で最終的なものが今年3月にできました。

【入澤委員】

まだ出来立てほやほやだということですね。

④が何て読むのかも分からなかったですし、豊かさまたいなものが指標だと思うのですが、先ほどの札幌ライフもそうで、もうちょっと答えやすくしてあげたほうがいい

のではないかなと思いました。また、あくまで主観的に自分はこう思っているというものもありますけれども、客観的、定量的なデータでこういう幸せ度は測れないものかなとも思っています。

例えば、花の消費量が多いところは幸福度が高いというデータがあるのですよね。つまり、札幌の花の消費量が増えていけばみんなが幸せに感じているかもしれないということです。例えばの話ですけれども、あくまで自分が主観的に思っているだけではないウェルビーイングな社会をつくれているなという指標は何かないのかはご検討されたのでしょうか。

【田村企画課長】

この取組の中では、主観的な指標を大事にしてみようという入口から入ったので、むしろ客観指標をある意味排除した状態で何ができるのかという考えがありました。

【入澤委員】

これはあくまでも主観的な指標だということで定義づけてしまって、皆さんはどう思いますかという設問を投げてということですか。

【田村企画課長】

返ってきたものを可視化するみたいなイメージですね。

【入澤委員】

分かりました。

それであれば、もうちょっと分かりやすい標語にしたほうがよかったのかなと思いました。

【玉腰座長】

まだまだたくさんのご意見があるかと思いますが、時間が押してしまっておりますので、一旦、ここで切りたいと思います。

全体を通じて事務局からご発言があればお願いしたいと思います。

【浅村まちづくり政策局長】

前回に引き続きまして、今回も様々な視点で大変価値のあるご指摘をたくさんいただきまして、ありがとうございます。今後の未来創生プランの素案をこれからしっかりつくっていく中で反映させていきたいと思えます。

時間の関係で全てに触れられないですけれども、世帯年収をどうするかという問題は非常に大きいのだなと感じました。我々も質の高い雇用を掲げておりますけれども、実際に

どのくらいの収入があるとかこういう生活ができるのだというイメージについて、プランの中に盛り込めるかどうかは分からないですけれども、例えばペルソナ分析みたいなことしながら、こういう世帯構成でこういう支援がある中でこういうことができるということをイメージできるようにすることも必要なのかなと感じました。

また、ラピダスなど、人手不足が広範囲に経済に影響してしまっていて、札幌市内でもいろいろなところにひずみが出ております。特定の企業名やプロジェクト名を掲げるということは難しいかもしれませんが、それらを分析した上で視点の中では背景として考慮したものにしていきたいと思えます。

また、子どもの経験機会をどうするかという問題についてです。これは、全市的なレイヤー、区のレイヤー、コミュニティーのレイヤーなど、いろいろとあると思うのですが、札幌市内においてコミュニティーの希薄化が進んでいる中、格差のない経験機会をどのように与えていくかは非常に大きな問題だと捉えておりますので、これについてもしっかりと意識したいと思えます。

それから、U I J ターン等についてです。フルリモートの働き方はコロナを契機にかなり増えてきていて、東京採用でも全く出勤しなくてもいいというようなところも多くなってきているという話を聞いておりますので、仕事があるから来てくださいということだけではなく、生活環境がU I J ターンのファクターになり得るということ意識してやっていきたいと思えます。

また、大学生へのアプローチについてです。例えば、ふるさと納税を活用し、市内の大学の学生や大学側といろいろなプロジェクトをしていくということにも取り組んできておりますので、そういったことも含め、うまく可視化できるようにアピールできればと思えます。

それから、多様な生き方、生活の仕方という視点、子育てに限らず、子どもを産まない選択肢もあるということについて丸山委員からお話いただきましたが、ウェルビーイングの中でも様々な多様性を認めるということ柱にしていきたいと思っております。

札幌市では、今、共生社会を推進するということを理念とした、外国人も含め、様々な生き方を認め合って生活していこうということや条例をつくっていきたくて考えておりますので、そういった視点も未来創生プランの中にしっかりと埋め込んでいきたいと思えます。

ほかにもいろいろとご意見をいただいておりますが、これについては事務局でしっかり整理し、反映していきたいと考えております。

本日もどうもありがとうございました。

【玉腰座長】

ありがとうございました。

それでは、閉会に当たって私からも一言申し上げたいと思えます。

限られた時間の中で活発なご意見をいただき、ありがとうございました。

特に全体をまとめることはいたしませんけれども、Well-being指標ということもありましたとおり、それぞれの市民が幸せに暮らせるようにという中で若い方が人口減少に対抗して子どもを増やす、子どもを産むということについて目が行きがちなのですが、それだけではなく、いろいろな方がつながり、その人らしく暮らせるような札幌であってほしいと思っております。

また、今日、話が最後まで行きませんでしたけれども、7ページの持続可能な都市の在り方のところでは、どんどんいろいろな公共サービスが減っていくという書き方になってしまっていますよね。しかし、むしろ、札幌の自然なり、いろいろな環境が残せる、未来にいいものを残せるのだ、そのために縮めなければいけないところがあるのだというメッセージにすることも重要ではないかなと思っております。

最後に、今日やろうと思っていたことがありまして、2ページのところに黄色の枠で目指すべき将来の姿とありますよね。ここには札幌市がどういう姿になっていきたいかということが書かれていて、ここだけでも委員の皆さんといっぱい意見交換ができると思っています。

今のお話を受けて、私としては、つながりがある中で安心して年が取れるというようなことをぜひ入れてほしいと思っております。未来、若者という話の流れは分かるのですが、そうではない色々な人を包み込んでの札幌市であるということも意識していただければいいなと思っておりました。

今日はそこまで皆さんと議論ができなかったのが不手際で申し訳なかったと思います。それでは、北海道庁から情報提供をお願いいたします。

5. 情報提供

【矢野北海道石狩振興局地域創生部長（オブザーバー）】

皆さんのご議論が活発な中、お時間をいただくのは大変恐縮ですが、北海道で総合計画ができましたので、その宣伝にお時間をいただき、簡単に説明をさせていただきたいと思えます。

資料6の北海道総合計画というホチキス留めの2枚物をご覧ください。

まず、北海道総合計画をつくるに当たりまして、北海道を取り巻く環境ということで、人口減少、経済や産業などの四つの視点で状況を把握しました。さらに、北海道の特性、潜在力は何だろうということで、広大な土地や地理特性、食料、エネルギーなど、様々なものを持っているということと掛け合わせ、計画をつくる際には皆さんのご議論も踏まえながら、「北海道の力が日本そして世界を変えていく、一人ひとりが豊かで安心して住み続けられる地域を創る」という目指す姿を策定し、その下の政策展開の基本方向と地域づくりの基本方向を軸に取組を進めていこうとしております。

政策展開の基本方向は三つの視点となっております。

一つ目は、潜在力発揮による成長ということで、その下に政策の柱が書いてあるのですが、食や観光といった施策の柱を基に取組を進めていくことにしております。

二つ目は、誰もが可能性を發揮できる社会と安全・安心な暮らしということで、子ども・子育て、教育・学び、医療・福祉などの施策の柱に取り組んで、上のほうに書いてある人口減少の進行や地域社会の縮小に直面する中、道民の暮らしを守り、北海道を次の世代に引き継ぐことを目指していきたいと思っております。

三つ目は、各地域の持続的な発展ということで、地域づくり、グローバル化、北海道の強靱化などを政策の柱としまして、道内各地域の特性とポテンシャルを生かした持続的な発展を本道全体の発展につなげていこうとしております。

裏面に行きまして、地域づくりの基本方向についてです。

北海道を六つのエリアに分け、それぞれの地域が目指す姿を進めていくため、個性と魅力を生かした地域づくり、様々な連携で進める地域づくりという二つの視点を設定し、取り組んでいきたいと思っております。

先ほど会議の中の補足説明をいただいております政策展開方針は、総合計画の地域計画に位置づけられていることから、この地域づくりの基本方向は6連携地域も目指す姿の方向性も総合計画に合わせて策定を進めているところですし、これを基本に展開していくということで作られているものです。

一番下ですが、今回、若い世代の皆様の意見を多数伺いながらつくってきたということで、いろいろな意見が出ているということに記載しています。

2枚目は、総合計画が出来上がりましたということで、出前講座を各地域でさせていただきたいと思っております。5人以上になりましたらこちらからご説明に伺いたいと考えております。裏面が申込書になっておりますので、ご興味のある方はぜひお申込みをいただければと思います。

また、今回の資料はキーワードしか書いていないのですが、本体はホームページで北海道総合計画と検索していただくと全編が出ます。大冊なので、全部を読むのはなかなか大変だと思うのですが、このキーワードで気になっているものや皆さんに関係するところについてはご一読をいただければと思います。

非常に雑駁ですが、北海道総合計画のご説明とさせていただきます。
ありがとうございました。

6. 閉 会

【玉腰座長】

情報をありがとうございます。

それでは、これをもちまして終了したいと思います。

第3回は11月下旬の開催を予定しているということでしたが、改めて事務局から連絡が入ると思います。

不手際で時間が延びてしまいましたけれども、今日はこれで終わりたいと思います。
どうもありがとうございました。

以 上